

# 日本におけるジャン＝マリー・ギュヨーの 受容について

鈴木 由加里

## はじめに

フランス思想が主体的に日本に輸入されたのは明治期からである<sup>1)</sup>。しかし、そのときに紹介された哲学的書物のうち、現在もアカデミズムの中であるいは日本の哲学教育の中で取り上げられるものはあまり多くない。

現在の「フランス哲学」研究およびフランス哲学教育において、もはや取り上げられない哲学者の一人にジャン＝マリー・ギュヨー Jean-Marie Guyau (1854–1888) (以下ギュヨー) がいる。ギュヨーは生命の哲学の先駆的存在であり、明治末期から大正期にかけて盛んに紹介され、一時期日本において隆盛を誇ったフランスの思想家である。当時、主要な著作はほぼ翻訳されており、広く読まれていたにもかかわらず、現在の日本においてその存在はアカデミズムに於いても忘れ去られた存在である。

本稿では、忘れられた哲学者ジャン＝マリー・ギュヨーに焦点を定め、その受容の経緯をたどることによって、「フランス哲学」がどのように受容され、取捨選択されてきたのかということを考察したいと思う。

## 1 ギュヨーの著作と生涯

本節では、ギュヨーについての簡単な紹介をしておきたい。アルフレッド・フイエ Alfred Fouillée (1838–1912) による評伝<sup>2)</sup> によれば、ギュヨーは1854年10月ラヴァルで誕生している。フイエは、ギュヨーの母、オーギュスティーヌ・テュエリー Augustine Tuillerie (1833–1923)<sup>3)</sup> の再婚相手であり、ギュヨーの義父にあたる。ギュヨーは幼い頃から、母親とフイエによる英才教育を受けた。17歳で文学士号を取り、19歳で「エピクロスから現代のイギリス学派までの功利主義的道德について」でフランス学士院の人文・社会科学アカデミーから賞を受けた。20歳でリセ・コンドルセの教壇に立っている。その後、健康のためにニースやマントンで過ごし、33歳で亡くなっている。

その著作は、道徳から教育、美学まで多岐にわたる<sup>4)</sup>。代表的な著作は、『義務も制裁も

ない道徳』、『未来の非宗教』、『社会学的見地からみた美学』である。この他に『現代美学の諸問題』、『遺伝と教育』、『時間概念の生成』がある。最後の二冊はギュヨーの死後、フィエの監修の元に出版されている。また、邦訳されていないが、詩集 *Ver d'un philosophe* (1881) がある。

短命だったギュヨーの著作を世に知らしめたのは、フィエの力によるところが大きい。フィエは、ギュヨーの死後に遺稿をまとめ出版しただけでなく、ギュヨーが残した遺児、Augustin Guyau (1883-1917) の教育にも携わっている。ちなみに、このオーギュスタンは、フィエの死後 *La Philosophie et la sociologie d'Alfred Fouillée* (Félix Alcan 1913) を上梓している<sup>5)</sup>。

このようなギュヨーの生涯の短さが禍して、各哲学事典、哲学史におけるギュヨーの扱いは小さいが、当時のヨーロッパにおいてギュヨーの著作は英語、ドイツ語など即座に翻訳され広く読まれており、ニーチェからクロポトキン、レオ・トルストイなどに影響を与えている。フランスでは、エミール・デュルケイムなどがギュヨーの著作を批判的あるいは好意的な理解を示す論考を発表している。ギュヨーは哲学的であると同時に社会学的な視点から美学を考察しており、その後のフランス社会学への影響も興味深いものがある。

ギュヨーの思想を一言で説明するならば、「生の哲学」であり、進化論的なパースペクティブにおける生命観を原理としているものである。十九世紀フランス思想史においては、メーヌ・ド・ピランを源とする形而上学的唯心論の系譜と進化論の影響を受けた「生の哲学」と位置づけることができる。ベルクソンの生命概念に対して、ギュヨーのそれは、厳密性を欠くという意味で「詩的」なものである。ベルクソンが唯物論的な生命観から精神性を回復し、スピリチュアルな純粋性と持続の観念にいたる生の原理を展開したのに対して、ギュヨーはかなり素朴な折衷論的な生の概念を道徳の基礎においているのである。例えば、ギュヨーが価値をおいている「豊穡さ」*fécondité* の概念は、生殖出産の身体的イメージを帯びて語られる。ベルクソンにおける創造性はまったく新しいものを創造する形而上学的な創造性、それは自由と同等の資格をもつものなのであるが、ギュヨーの生命は、形而上学的洗練とは離れた個人的「生命」として措定されているのである。そこから道徳も倫理学も美学も引き出してみせる。進化論的な生命のイメージに基づいて「神」に依拠しない道徳のありかたを提案していくのである。その道徳観が述べられているのが、『義務も制裁もない道徳』である。「神」と「制裁」の概念なしに、アノミーに陥らずに「道徳」を語ることの過激さが当時の思想界に大きな衝撃を与えたのであった。ギュヨーの生命概念と道徳論については素描するに留め、次に日本での受容状況について考察したい<sup>6)</sup>。

## 2 ギュヨーと中江兆民

日本で初めてギュヨーの著作を日本に紹介したのは中江兆民である。中江兆民は、仏学塾

のテキストにギュヨーの“*La Morale anglaise contemporaine*”を使用している。どの版を使用したのかまでは資料的裏付けがとれないのであるが、「仏学塾規則」の明治15年の「仏学塾規則」<sup>7)</sup>において教科書としてギュヨーの著作が上げられているのである。表記は、「グユイヨー 英儒道義論」となっている。兆民が仏蘭西学舎を開いたのが1874年（明治7）年であり、ギュヨーの原著が出版されたのは1879年であるので、テキストに使ったのは1882年（明治15）、仏学塾の再開時からではなかったかということが想定される。

そして、1882年（明治15）は、『政理叢談』（仏学塾出版局 明治15年2月20日第1号から16年12月17日第55号 各月2回、3回 第7号から『欧米政理叢談』に誌名変更）が出された年である。この雑誌でギュヨーの著作は、本格的に翻訳紹介されたのである。『政理叢談』は、兆民と門弟による（あるいは協力者によって）出された翻訳政論雑誌である。ここには、80点以上の論考が紹介されているが、翻訳者は匿名や偽名によって記されており、どの論文にどこまで兆民が関与していたのかを立証することは難しいとされている。

しかし、兆民の研究者である井田進也は、そこで紹介されている論考の原典となるものを発見検証している<sup>8)</sup>。本稿では井田の論考を参考に兆民とギュヨーの関係を追っていきたい。

井田進也は、1872年（明治5）から1874年（明治7）春にわたるフランス滞在時から帰国後活動開始までの兆民の思想的営為を跡づけることを試みている。兆民がその間どのような著作を読んだのかということは、史料が存在あるいは発見されておらず、特定することは難しい。しかし、井田の研究によれば、兆民がギュヨーの著作にであったのは、兆民のフランス滞在時アコラスを介してであると推定されている。

『政理叢談』は「概して評価の定まった」著者の論考を採択していたが、その中で、原著が出版された時には、24歳だったギュヨーのような無名な人物を取り上げるのはきわめて異例のことであり、そこになんらかの理由が存在していると井田は考えている。アコラスが当時主催していた“*La Science Politique*”『政治学』誌上において、ギュヨーの *Moral d'Epicure* の書評がされ、ギュヨー自身も寄稿していることから、それを見た兆民がギュヨーの翻訳に至ったのではないかということを井田は述べている<sup>9)</sup>。

しかし、兆民とエミール・アコラスの私塾の関係については、兆民自身がそのことについて多くを語っておらず、兆民がどのような深さでこの私塾に関わっていたのかは兆民研究者間でその見解は異なっている<sup>10)</sup>。

エミール・アコラス Emile Accollas (1820-1891) は、法律学者であり、各国留学生のためにフランスの大学に入学するための予備校的な私塾を開いていた。西園寺公望もこの私塾に学び、アコラスについてその自伝などで多くを語っている。西園寺公望の自伝には兆民がその私塾に入ったことが述べられているのだが、兆民の滞仏期間にしても特定できておらず、どの時期にどのような経路によって、アコラスの知遇を得るに至ったのかということについてもいくつかの解釈が出されているが、決定的な資料が発見されていないので、「解

積」の域を出ない。

また、井田は兆民は文部省の委嘱によって、フイエの *Histoire de la philosophie* (Charles Delagrave 1875) の翻訳である『理学沿革史』を出しているが、それもまたギュヨーの義父であり師であったということからフイエを知ったのではないかと推定している。

兆民がギュヨーやフイエを取り上げてはいたものの、大学制度が成立し哲学が大学で講じられるようになるとギュヨーやフイエはアカデミズムの中で一端消えていつてしまった。再び、ギュヨーがアカデミズムや文壇において取り上げられるのは、明治の末期から大正期にかけてである<sup>11)</sup>。

### 3 ギュヨーの翻訳者について アカデミズムと通俗性

ギュヨーの著作の翻訳が本格的に行われたのは大正期になってからである。ギュヨーの主な著作はほとんど訳され、しかも同じ著作に対して複数の翻訳者が存在しているのである。いわゆる哲学研究者による翻訳だけではなく、翻訳を専門とすると思われる在野の人々による翻訳も含め、一つの著作にいくつかの翻訳バージョンが存在しているのである。このような状況から読みとれるのは、アカデミズムだけでなく広く読者を獲得していたということである。

まず、年代順に翻訳書を紹介していこう。最初に翻訳されたのは、前節で紹介した「政理叢談」第18号における *La Morale anglaise contemporaine* の翻訳「スペンセル政治論略」(鳥洲生訳) である。その次にギュヨーが翻訳されるのは、大杉栄によるものである。大杉は「近代思想」(1913) 誌上において「生の道徳」と題して、*Esquisse d'une morale sans obligation ni sanction* の部分訳とギュヨーの紹介を試みている。大杉はタイトルを『道徳無義務無賞罰論』と訳している。

以下、戦前の翻訳本を順次あげていくと次のようになる。

大西克礼『社会学より見たる芸術』内田老鶴圃 1914 (大正3)、稲毛詛風『遺伝か教育か』隆文館図書 1918 (大正7)、西宮藤朝『教育と遺伝 社会学的研究』東京堂書店 1924 (大正13)、井上勇『時間観念の創成』ギュイヨオ集2 聚英閣 1925 (大正14)、『社会学的に見たる芸術』聚英閣 1925 (大正14)、石上是介『現代美學の諸問題』聚英閣 1926 (大正15)、『倫理学 義務及び制裁なき道徳の考察』1926 (大正15)、北吟吉『社会学上より見たる芸術』潮文閣 1928 (昭和3) 西宮藤朝『社会学上より見たる芸術』世界大思想全集<sup>12)</sup> 第55巻 春秋社 1931 (昭和6)、長谷川進『生の倫理』洛陽書院 1940 (昭和15)。

これらの翻訳において、Guyau のカタカナ表記も一様ではないが、大西克礼や次節で取り上げる錦田義富のような帝大卒の研究者においては、「ギュヨー」という表記が採択されているが、その他の翻訳者は「ギュイヨオ」と「ィ」を入れた表記にしている点が興味深いと

ころである。西宮藤朝は、春秋社の『社会学上より見たる芸術』において、原著者の呼び名についてのこだわりを見せている。

「是迄我國の學界では原著者の名 J. M. Guyau の呼び名をギュヨオと書いてゐた。それ故余も強ひて異を樹てる程の問題でもないので、此習慣に従つて來た。本書に於ても従つて本文にはギュヨオとした。然しギュイヨオと書いた方が一層其原音に接近してゐるのであり、且つ我國でも漸くギュイヨオと呼び馴れて來つゝあるので、本文の校訂後乍ら、思ひ立つて表題丈をギュイヨオとした。此點讀者の諒恕を乞ふ次第である」(『社会学上より見たる芸術』1931 p. 32)

とわざわざ表題だけを「ギュイヨオ」にするというこだわりには、原音主義に則って自分の正統性を主張する強い思いが感じられる。どのようなカタカナ表記がふさわしいのか、ということは慣例に従っているだけであり、何をもって正統とするのかは、その時の表記方法や大学の研究者の権威によって決まるところがあるが、それは現在でも変わっていない。原音主義にしても、外国語の発音がどう聞こえるかということを厳密にカタカナ表記にすることは不可能であり、柔軟に対応する必要があるのだが些末なことで学問の正統性という権威を示すということは分野を問わず現在も変わらず行われているように思われる。

大正年間から昭和初期にかけて、ギュヨーの主要著作はほぼ翻訳紹介されている。大正年間におけるこのギュヨーの翻訳の多さから言えるのは、当時ベルクソン<sup>13)</sup>と同じようにギュヨーが流行していた<sup>14)</sup>ということを示している。

これらのギュヨーの翻訳者たちはいわゆる帝大系研究とアカデミズムの側と在野側とに区分されるのだが、例えば大西克礼は東京帝大出身であり、稲毛詛風、西宮藤朝、北吟吉は早稲田大学という具合にギュヨーの翻訳に関しては東京帝国大学出身者以外の力によるところが大きいのである。ギュヨーの日本における受容の特徴の一つとして、官学とは別の経路によって翻訳がなされていたということがあげられると思う。これは、ギュヨーに限らず、フランス哲学が日本に輸入される経路の一つとして考えられるのではないだろうか。官学としてのドイツ哲学の優位に対抗するものとして、フランス哲学あるいはフランス思想の特性なるものが措定されていったという過程をみることができる。

このような対官学というスタンスをその著作や生き方によって示したのは北吟吉である。北は北一輝の弟であり、本人も自民党の結成に尽力し、自らも衆議院議員として政治活動をしている。北は、早稲田大学文学部を1908年(明治41)に卒業し、1914年(大正3)から1918年(大正7)まで早稲田大学講師を務めている。その後、いわゆる「早稲田騒動」に巻き込まれ、1918年(大正7)から1922年(大正11)まで外遊した。北吟吉の元秘書稲邊小二郎によれば、この間「大正七年九月、ハーバード大学大学院哲学科入学、同九年にフランスへ行き、ベルグソンと会見。イタリア、オーストリア、チェコスロバキアを歴訪し、哲学者クローチェを訪問。大正九年四月、ドイツベルリン大学に一年、ハイデルベルク大学に一



年半留学」していたという。

北のフランス思想との関わりは『ベルグソン哲学の解説及び批判第一篇・第二編』（南北社 1914）から始まる。これは早稲田大学講師を務め始めたころの著作であるが、その後の政治活動へと至る北の政治思想、戦争哲学などへのベルクソンの影響関係は生の哲学と愛国思想及び国家主義との親和性を考える上で興味深いものがある。1932 年（昭和 7）から 1933 年（昭和 8）にかけ、帝国美術学校校長として美術視察のため欧米各国を歴訪し、その際フランスではベルクソンと再び会見している。

北が、『社会学上より見たる芸術』を訳出したのは、1928 年（昭和 3）である。北はその後、帝国美術学校（現武蔵野美術大学）の創立に関わり初代校長となるが、1935 年（昭和 10）に学生のストライキ事件から大学は分裂、同年 9 月には多摩帝国美術学校（現多摩美術大学）を創設するにいたった。ちなみに、帝国美術学校から多摩帝国美術学校へ移った教員の中に三木清がいる。帝国美術学校でその後を埋めたのが、谷川徹三である。1937 年（昭和 12）には谷川徹三が美学概論、務台理作が哲学概論を担当している。このような北の年譜と重ね合わせて考えると、ギュヨールの翻訳は北の美学芸術研究の一環であったことが見えてくる。北はこの後政治活動に一身を捧げることになるのだが、元秘書の稲邊は以下のように述べている。

「学者としての北は、代議士にならないで、無位無冠で、哲学の道、学術文化の研究に没頭する時が、一番ふさわしい姿であったと思う」<sup>15)</sup>

北は学者として大成する可能性も秘めていた存在であり、北に対する研究が政治活動や憲法改正問題に限定されているのが残念である。

しかし、ギュヨールの翻訳者たちの中で、北吟吉や稲毛祖風、西宮藤朝など私学の教員や学校教育に携わった者については資料が残っているのだが、いわゆる翻訳家たちにおいてはその経歴すら分からない存在が多い。石上是介と井上勇については翻訳書が残されているだけでその経歴についての詳しい資料は残っていない。両者は、聚英閣からギュヨールの主著をほとんど出しているにもかかわらず、訳者の序文や解説などは残されておらず<sup>16)</sup>、彼等がどのような形でギュヨールを受容・評価していたのか不明なままである。

聚英閣は大正期の文学に影響を与えた本を数多く出版しているのだが、どのような出版社であったのかは資料が存在していない。井伏鱒二が一時期勤務していたことは知られているが、発行者である後藤誠雄についても、出版社の成り立ちについて明確に分かる資料は残されていないのである<sup>17)</sup>。

出版された著作のラインナップを見ると社会思想系の翻訳出版物が目につく。スウェーデンの思想家エレン・ケイからイタリアの教育学者ジェンティーレまで、幅広い翻訳書を出版している。また、白樺派の評論や大杉栄と伊藤野枝の小説集などが含まれる「社会文芸叢書」などは、大正という時代的雰囲気と合った出版物を多く出していたようである。聚英閣

だけでなく、明治末から大正期には「叢書」類が数多くの出版社から出されている。これは、広く支持された「教養」としての「読書」のために、「平明」「簡潔」な表現による哲学の通俗解説書や古今東西の文学作品や思想書の抄訳（あるいは全訳）が広く求められていたことが背景にある。夏目漱石の「高等遊民」という言葉が示すような、働かなくても生活に困らず自由に読書や思索にふけることの出来る存在が社会問題としてクローズアップされてきたことや、社会全体の識字率のアップによって、読者人口が増え俗向けの哲学思想系出版物の必要性が高まっていたことなどが存在している。文学ではなく、哲学も読書の楽しみとして消費されていることなどが考えられる。そして、そのような出版状況に应运、翻訳や評論を提供する「大学人」たちも存在していたのである。

しかし、そのような出版物に対して、哲学への関わりが片手間であるとか、一時の流行に従って翻訳を試みただけの読み物である、といった批判がアカデミズムの側からなされていたことも指摘しておく必要がある。

例えば、カント学者の宮本和吉は「明治44年」の思想界を概括している文章を『哲学雑誌』299号の「雑録」に残しているが、それは単なる概括ではなく、学者として「思想界に住んでゐる」立場性から俗世間を見下ろすような文章のスタンスが如実に表れている。宮本は以下のように冒頭で概括している。

「先づ著述ではドンナ物が出たか。いつの年も同じであるが思想一般に關係した方面で随分種々の本が出た。併しそれは買りたい、儲けたい一方の本が多くて本當に學術書として、若くは思想書として尊重に値するものは極めて少い。近頃は生活難に比例して大家でも小家でも盛に本を書くやうである。無論買る爲に通俗性のタツプリな、俗受けするものを拵へなければならぬ。従つて名の聞こえゐる人でも人目を牽きさうな、面白さうな題をつけて而かも内容の極めてプーアな本を書いた。これは低級の讀者を相手にするもので、思想界一般のレベルから云へば無論不問に附していゝ事である」<sup>18)</sup>

この宮本の言説から見えてくるのは、一般向けの書物や通俗化した出版物が売れ行きもよく大量に出回っていることに対する、アカデミズムの中で特権的な地位にある東京帝国大学や一部の高等教育機関に在籍する帝大卒教員たちの「苦々しい思い」である。確かに、数多く出されている翻訳物や哲学思想系の「読み物」は学問的正確さを欠くものもあった。フランス哲学やフランス文学の翻訳物にしても、英語からの重訳であるものも多々あった。しかしながら、このような出版文化と在野の翻訳者の存在がギュヨーをはじめとするフランス哲学受容の一翼を担っていたことは間違いないのである。そして、そのような状況に対して、自らを「正統」と位置付ける「学者」たちのスタンスには、興味深いものがあるが、この点については稿を改めたい。

次に、大哲学科を中心とするドイツ哲学優位の教育及び研究体制の中でギュヨーの思想がどのような受容をされていたのかということを見ていきたい。

## 4 アカデミズムの中でのギュヨーとフランス哲学の受容について

大杉栄は、ギュヨーの翻訳紹介をした「生の道德 ジャン・マリ・ギュイヨー」の冒頭で「この本のことは、今年であったか去年であったか、たしか丁酉倫理会の講演集に、「道德無義務論」という題で、誰かのだいぶ詳しい紹介があったはずだ」<sup>19)</sup>と記している。この論文は、1912年（明治45）116号から117号にわたって掲載された錦田義富による「ギュヨー道德無義務論」を指している。

錦田義富（1884-1927）は、京都帝國大学文科大学哲学科を明治44年に卒業し、高等中学の教諭、真宗大谷大学、広島高等師範を経て、大正9年の欧米留学の後、東北帝国大学教授に就任している。いわば、出来たての京都帝国大学で教育を受け、欧米留学後に帝大教授におさまるという「研究者」のスタンダードコースを歩んだ存在である<sup>20)</sup>。

大杉栄と錦田は一歳違いでほぼ同年齢であると言える。しかし、大杉は在野の社会運動家・評論家であり、帝大系の学問的権威とは対極に位置している存在である。立場のまったく違う二十代半ばの二人が、ギュヨーやベルクソンのような「生命」の哲学を研究しようと考えたところに時代性をみることも可能であろう。大杉は錦田の論文に対して論評は述べてはいないのだが、ここで簡単に錦田のギュヨー論文について説明しておきたい。

「ギュヨーの道德無義務論」は、1913年（明治45）2月に京都文科大学哲学倫理学研究大会においてなされた講演の大意である。本編の前に付された紹介文は、桑木厳翼が書いている。桑木はこの他に錦田が抄訳した『ベルグソンの哲学』にも序を寄せており、京都帝国大学時代の指導教官的な立場にあった存在であることが想像される。

これは、ギュヨーの *Esquisse d'une morale sans obligation ni sanction* の内容のまとめがメインの論文である。最初にギュヨーの生涯の説明とニーチェとの比較によってギュヨーの価値付けを行い、ギュヨーの道德論の要約、最後はフランス哲学の特性を述べてまとめるという手堅い学生論文のようなスタイルを取っている。錦田は1912年（明治44）の卒業であり、卒業論文かもしれないがそれに手を加えたものである可能性も否定できない。「手堅い」ということは、言い換えればギュヨーの言葉そのままにまとめているということであるが、大杉がこのようなスタイルの紹介を取らず、ギュヨーの著作の結論部分だけを訳出しているのは、このような学生らしい優等生的なギュヨーの紹介を避けるためであったと推測される。

ギュヨーの生涯や概説については、大杉同様フイエの論文をそのまま使っているが、錦田の論文にはそのような注記はない。ニーチェがギュヨーの著作を読み、大いに感動して書き込みをしていた、ということを述べているのだが、これはフイエの著作にあるエピソードそのままなので、おそらく大杉と同様にフイエの著作を参考をしていると思われる。

錦田自身の見解として、日本においてギュヨーが不当に低く扱われていることについて批



判的に論じている。

「而して余の見る處によれば學説としてはギュヨーの方がニーチェよりも遙に正當温健（ママ）であり、批評や議論も公平周匝である。然るにニーチェの名のみ獨り世に喧傳せられギュヨーの名の多く學者に注意せられざるは、啻にギュヨーの爲に悲しむべきのみならず、學界の一恨事とすべきだと思ふ」（強調は原文）<sup>21)</sup>

錦田は、ギュヨーは生命の「強度及擴張」（これを大杉は「拡充」と言い換えるのだが）を道德の原理とするという非常に個性的な思想でありながら、道德的な振る舞いや規範意識を否定することはないということを理解しており、これを「穩健」であると述べているのである。ギュヨーは道德そのものを否定するのではなく、神や道德律という押しつけられた義務と責務を批判しているのであり、自分から従うような道德規範の存在を否定するのではない。大杉はギュヨーの生命概念に対して、欲望や本能、自由というような意味を読みとり、そこに価値を見いだしていくのだが、錦田は反対に道德規範を否定しないギュヨーの思想を「穩當」と評価するのである。更に錦田は「正當穩健なる思想よりは過激奇矯の議論が歡迎さるゝ習いなれば」こそ、ギュヨーの思想が広く知られることがなかったのは無理もないことなのだ、ということを指摘していくのである。

錦田と大杉のギュヨーに対する評価ポイントが異なるのは、二人の立場性の違いも関係しているに加えて、ギュヨーの著作自体にそのような異なった読み方を許す曖昧さが存在しているからであろう。

しかし、錦田の論文におけるギュヨーをあえて肯定的に評価する論を立てることに、別の目的が含意されていると考えられる。

錦田はこの論文のまとめにおいて、ドイツ哲学とフランス哲学の比較論を展開している。

「佛蘭西哲學は數學的であるとの評がある。この評は、一方では理路正確議論明快なりとの賞賛の意も含めて居るが、他方に於ては一面的皮相的なりとの避難の意をも含めて居る。彼等は綜合統一の方面に於ては秀でて居るが知識の廣博と深淵を缺いて居る。此弊は從來佛蘭西哲學全體を通じて見らるゝ短所であつた。これを最もよく表示して居るのはコムトの實證哲學であらう。獨逸哲學は此點に於て佛蘭西哲學と正反對である。獨逸哲學は動もすれば晦澁混亂の弊に陥つて居る。これ彼等の了解する人生が豊富多様にして深奥幽玄を極むるより由來して居る。カントやヘーゲルは最もよい代表者と見るを得るだらう。一は明快なれども、淺薄の譏を免れず。他は深奥なれども難澁の弊あり。一は論理の整然を重じ、他は直覺の飛躍を尊ぶ併しこは過去の佛蘭西哲學に就ての避難で千八百七十年以來の佛國思想界には適用する事ができぬ。傳承に捉はれず、教權に壓せられず、自由に思索し、豊富多様な發達を遂げつゝあるは、現下の状態である」<sup>22)</sup>（下線強調 原文）

錦田によれば、フランス哲学は明晰判明であるが深遠さがなく、ドイツ学は深遠ではあっても難澁である、ということであるが、このような「国名」を冠した哲学についてのイメー

ジを抽出しているのである。この「新カント派」的な哲学史観は当時の京都帝国文科大学哲学学科における哲学史教育に由来するものであるように思われる。当時の京都帝大の西洋哲学史は、明治39年桑木厳翼、明治40年朝永三郎、その後朝永の留学と入れ違いに桑木が担当している<sup>23)</sup>。

錦田は、このようなフランス哲学観を述べた上で、ドイツ哲学のように「大哲學系統組織者」はいないが深遠かつ自由な思想家達がフランスに出現していることを強調する。

「ルヌビエー。タルド。ブートルー。ベルグソンの如き學者に對しては決して數學的形式的皮相の一面的なりとの評は下されぬ。そして一八百七八十年代の佛蘭西思想界の此傾向を最もよく代表せる學者の一人として、確かにギュヨーを數える事が出来る」<sup>24)</sup> (下線強調 原文)

この論文はギュヨーの思想内容についての論文というよりは、むしろ、新カント派の影響を多大に受けた日本における「ドイツ哲学優位」に対して、いかにフランス哲学が同等の価値を有するものであるかを示すためにギュヨーを取りあげているように読める。

このようなフランス的なものとドイツ的なものの対立軸の中で、フランス哲学や個々のフランスの哲学者達を位置づけていく、錦田の論述スタイルはフランス思想がアカデミズムにおいて論じられ始めた時代に限られたものではなく、少なくとも戦前の哲学研究においては共有されていたものである。

例えば、三宅茂は大正14年に東京帝国大学哲学科を卒業したフランス哲学研究者であり、ドミニク・パロディ Dominique Parodi の *La Philosophie contemporaine en France: Essai de classification des doctrines* の翻訳（部分的には抄訳）や松元竹二編『哲学講座』誠文堂（1931）において「フランス生命哲學」を担当している。

三宅による『現代佛蘭西哲學』の翻訳には、昭和12年に発行された改訂版があり、これには本文に手が加えられているだけでなく、序言も新たに書かれており「一九三五 九、一五」という記述がある。パロディとは手紙のやりとりがあったようだ。

この序言の中にフランス哲学とドイツ哲学の相克についての興味深い記述がある。それは、フランス哲学研究者三宅茂による、ドイツ哲学に対するフランス哲学研究の優位を説く言説である。少々長くなるが引用したい。

「實際最近まで我國では割合に佛蘭西の哲學は閑却されてゐた。それでも明治の中頃までは政治家や法律家によって多少は研究され、ルソーやモンテスキューの思想に影響されたものも少なくなかつたのであるが、中江兆民歿後は全く忘れられてしまつた形である。それには理由もある。第一は、佛蘭西に世界的の大思想家が續いて現はれないで、却つて獨逸にカント以後大哲學者が排出して、思想的に全歐洲を壓倒した觀があつたこと。第二は、我國の國情が明治末期に至つて、萬端漸く整備した大學教育もそれにつれて確立し哲學研究が世間から講座へ移り、佛蘭西の哲學と相容れない「講壇哲學」が出来たこと。併しながら今日では

既に右の二原因は自然的に解消しつつある。佛蘭西哲學研究の要求が起り、行動主義文學が勃興したことには當然の理由があると言はなければなるまい。十九世紀の佛蘭西にはコントを除いては世界の注意をひいた者は一人もなかつたと言つていい。而もそのコントは逆境に孤獨の一生を送った哀れな哲學者に過ぎなかつた。ヘーゲルやシェリングが得意の生涯を大學教授として大思想家として暮したのとは大きな相違である。佛蘭西にはコントのほかにメヌ・ド・ピランの深い思索生活があつたけれども、彼は一介の平凡な政治家として終り、その著作も生前には一冊も刊行されなかつた。従つて世界の思想界に注意されるやうになつたのは最近のことである。ショペンハウエルが熱狂的な愛讀者に取巻かれてゐたのとは雲泥の相違であらう。併し今日の哲學界は全然その状態を異にしてゐる。世界思潮の決定的源泉は佛蘭西にある。少なくとも、今日の哲學的運動を無視しては、世界の哲學を語ることはいふまでもないと言つていい。

次に我國の大學は明治・大正の三四十年をもつて、ひと先づその進化を完了した。以前は大學卒業生たる學士様は、その肩書きだけで、換言すれば、その有する講壇の學問だけで直ちに社會生活が出来たのである。ところが、昭和の今日では成績優秀な學士でさへ、教場と同じやうに社會を考へてゐたのでは劣敗者にならなければならない。大學生は社會と没交渉であることを得なくなつた。大學の理想主義は解消しつつある。哲學は大學で研究されなければならないけれども、社會生活や宗教生活その他萬般の人間生活と離れた今間迄のやうな講壇哲學では、もはや大學そのものの本質と合はなくなつて來た。哲學は官僚主義的獨善に終始することが許されなくなつたのである。かうして我國の思想は、人間意識の徹底を基調とする佛蘭西の哲學に注目するやうになつて來た。この實に自然な要求に對して、大學研究室の硬化した頭腦の哲學者がするやうな反抗ほど馬鹿らしいものはない。大學を始め方々の高等學校の教壇で、今日も昔ながらの體系的、時としてスコラスチクな獨逸哲學が何等の批判的意識を喚起することなく、平然と講じられてゐるのは、明治・大正に於ける大學の進化が残した講壇哲學の名残である。

尤も或る人たちの意見に依ると、佛蘭西の哲學は日本人の性狀に快適しないから、従つて多く顧みられないのである。この説には一理ある。併しかういふ意見を有する人は實は餘り佛蘭西の哲學を知つてゐない。恐らくかういふ人たちは更に深く研究したならば、日本人の性質に合はないことはないと言ふべきであらう。といふわけは、全體として佛蘭西の哲學は分析的で心理學的で、一見、日本人の思想傾向と正反對であるけれども、さうした現實の哲學の背後に流れる或る大きなものの肯定は、我々日本人の生活と共通する感情である。けれども分析的で心理學的な哲學は體系を成さない傾向があるから、常に未完成、未結論に終り、さうした哲學は模倣するには頗る不適當である。そこで模倣の巧みな、そして模倣の必要のあつた日本人には快適しなかつたのであらう。同様に綜合的で形而上學的で體系を重んずる獨逸の哲學が日本人に適したことも頷かれる。併しもはや模倣の時代ではない。外国

の哲學をただ研究するだけが能でない。外國の哲學を研究しぬいて、その背後にあるものを日本精神に同化しなければならない。かうした研究には體系の概念ほど無益なものはない。體系は模倣するためのモデルとしては都合のよいものであるが生命がない。哲學そのものは體系のあるところ以外にある。眞に哲學しようとするものは體系の意志に退化しないことが先決要件である。

要するに現今の日本に於ける哲學研究は方法そのものを革新しなければならない時機に遭遇してゐるのである。この時に當つて佛蘭西の哲學が思想家の注意をひくやうになつたのは喜ぶべきことである。尤も二十數年前にベルグソンの哲學がオイケンの哲學と並稱されて一時非常に流行したことがあり、その後もベルグソンだけは我國でも絶えず哲學者の口や筆に上つてゐるやうである。併しベルグソンの哲學は佛蘭西の唯心論哲學の一契機を成すものであつて、これだけを切り離して、傳統的素地となつてゐるものを考慮しないならば、眞の理解は得られないばかりでなく、却つて非ベルグソンのベルグソン哲學を製作するやうなことにもなるであらう。現に我國の哲學者のうちには、ベルグソン哲學を一も二もなく形而上學的實在論にしてもふ者があるし、また他方では心理學的純粹經驗論の哲學にしてもふ人もある。前者は、多くの場合、獨逸の哲學書に據つており、後者は英米のそれに豫つてゐるやうである。どちらにしても完全な理解を示すものではない。素地となつてゐる哲學的精神からベルグソン哲學を切抜いた上で、それぞれの立場から解釋したものにはほかならぬ。徹底的に全體的に理解しようとするものは、先ず本書のやうな佛蘭西精神に成る哲學の一般的序説によつて、入門しその後、ベルグソンなり誰なりの原典に就いて研究するのが最も確實な方法である。」<sup>25)</sup> (3-7 頁)

三宅は明治・大正にかけて發展してきた大学での哲学教育及び哲学研究を「講壇哲学」と呼び、体系的なドイツ哲学の模倣をしてきたことを徹底的に批判している。そのような「講壇哲学」はもはや社会的に通用しないのだとし、「世界思潮の決定的源泉は佛蘭西にある。少なくとも、今日の哲學的運動を無視しては、世界の哲學を語ることはできない」とまで言い切るのである。また、大正期のベルクソンの大流行についてもフランス哲学からベルクソンだけを切り離し、ベルクソンの著作ではなく、ドイツや英米の解釈を通したベルクソンの浅薄な理解を指摘し、ベルクソンだけにフランス哲学を代表させるような受容のあり方を批判するのである。

このようなアカデミズムにおけるドイツ哲学の優位を批判し、それと比べてフランス哲学の有用性をあえて主張する理論が展開されている背景には、三宅が指摘しているようなドイツ哲学優位の大学アカデミズムの存在がある。

明治 45 年の『哲學雜誌』の 300 号記念の雑誌に掲載された伊藤吉之助による「哲學會史料」によれば、文明開化の時代、哲学は「實用的、社會的目的」に研究されるものであり、実用性をもった哲学が大学で講じられていた。外国語も実用的という点から英語が重んぜら

れ、ミル、ベンサム、スペンサーの哲学が主として教えられていたのである。東京帝国大学の初期には、外山正一やフェノロサがスペンサーの哲学を教えていたが、1870（明治20）年代には「スタイン等の國家論が輸入され、獨乙語が次第に重んじられる様になって獨乙の學風は我國に迎へられた。フェノロサ氏がヘーゲルを講し、ケーベル氏がカントを講し、新來のブッセ氏（二十年一月より開講）がロツツェの哲學を祖述する頃から獨逸の純正哲學がやうやく英國のそれに代る趨向を示して來た」<sup>26)</sup>（傍点強調 原文）

とされ、1892年（明治25）11月にケーベルが来任し、東京帝国大学哲学科はドイツ哲学一辺倒になっていく。このような東京帝国大学における哲学教育及び哲学研究の経緯によって、日本に於けるドイツ哲学優位性が確立していくのであるが、それと同時にドイツ的なものと日本との親和性が語られるようになる。それと同時に、フランス哲学は日本人には適していない、日本的な文化的メンタリティに合致しないのだ、という論に転化されたのである。

これに対して、三宅は反論をしているのである。ドイツかフランスかという哲学研究上の代理ナショナリズム闘争の背景には、日本独自の哲学の創生、あるいは日本の文化的特性形成というナショナリスティックな欲求がある。ドイツ哲学一辺倒なアカデミズムにおいて、ドイツ哲学は西洋的なものの象徴であり、それとは違った日本の哲学を立てるためにドイツ哲学とは系統の違った、しかも日本的な精神に取り込みやすい思想をフランス哲学の中に見いだそうとしていたのである。このような日本の哲学者（哲学研究者ではなく）の営為は、西田幾多郎や九鬼周造などに見てとることができるだろう。

このような日本に於ける哲学研究の目的に合致しなかったためにギュヨールのような哲学者は哲学研究からはずれていったのであり、思想史からも排除されていくのである。日本的なものを形成する時にフランス哲学に必要とされたのは、ドイツ哲学に存在する「体系」に対して、同時代性であり、1930年代後半には、それにはベルクソンでさえ「過去が存在」として価値を見いだされなくなっていくのである。講壇哲学に仕立てられたドイツ哲学やどのような分野においても諸外国と渡り合うために必要とされた英語圏の文化と対抗するための「フランス」哲学の根幹となるべき「大思想家」としては、ギュヨールは物足りない存在なのである。

哲学的なビッグネームしか研究する価値はないという哲学教育観は、帝國大学による権威のもとで培われたものである。それは、西洋の哲学をいち早く取り入れ日本の近代化のために使える理論を抽出するという過程の効率化を目指すために有効な価値観であっただろう。しかし、「哲学」「思想」をひろく考えれば、文化全体のあり方を特定の哲学者や哲学史観で代表させ、それを学ぶだけで事足りりとするのは、「哲学的」営為とは程遠いものと云わざるを得ない。このような哲学研究観が哲学思想の豊穡さを犠牲にした上でなりたっていることは言うまでもないことである。西洋思想の森の巨木（と思われるもの）だけを信仰し続けるようなありかたは日本の哲学の貧困をもたらしたのである。この学問的「貧困」がギュヨ



一の哲学を一過性のブームとして、歴史の彼方に追いやってしまったと言えよう。

## 注

- 1) フランスの書物が日本に輸入されたのは江戸期からである。オランダ語の書物を通じて、フランスの書物も伝えられていた。しかし、それは実用的なものに限られており、アンブロワズ・パレ Ambroise Paré (1509-1590) の『外科学概論』やショーメル (1632-1712) の『百科事典』などが紹介された。このショーメルの『百科事典』は、蚕書和解御用の事業として訳出作業が行われた。これは、ショーメルの百科事典のオランダ語版 (Huishoudelijk Woordenboek J.A. De Chalmot によるオランダ語版) を使用したもので、宇田川玄眞 宇田川裕庵 大槻玄沢 小関三英などが携わった。1811 年 (文化 8) から少なくとも 1845 年 (弘化 2) まで約 35 年間訳述作業は続いたが出版はされなかった。

日本における仏学の開祖は村上英俊 (1811-1890) であるが、彼がフランス語と出会ったのも松代藩時代に、火薬製造のために佐久間象山と取り寄せたベルセリウス Jons Jakob Berzelius (1779-1848) の『化学提要』がフランス語版だったため、フランス語を学んだのである。このことが、仏・英・蘭語対照辞典『三語便覧』(1854) の後の仏学塾・達理堂の開塾、幕府のフランス語学習に使われていた『仏語明要』(1864) やその他のフランス語辞典の出版に結びつくのである。

富田仁『フランス語事始 村上英俊とその時代』日本放送協会 (1983) を参照。

- 2) Alfred Jules Émile Fouillée, *La Morale, l'art et la religion d'après Guyau*, Félix Alcan, (1889) pp. VII-X.
- 3) 2) オーギュスティヌ・テュエリー (1883-1923) は、ラヴァルの繊維製造業者の娘として生まれ、20 歳の時 (1853) でラシャ布の仲買人である Jean Guyau 36 歳と結婚する。しかし、夫の暴力によって、ジャン・マリーの誕生後別居生活に入る。オーギュスティヌは、生計を得るために小学校教師になる。その後、フイエと出会い同居生活に入る。当時のフランスでは女性からの離婚を認めていなかったために、離婚が成立しフイエと正式な婚姻関係を結ぶのは 1885 年まで待たなくてはならなかった。オーギュスティヌは、G. Bruno というペンネームで、大ベストセラーとなる教科書を出版している。

*Francinet. Principes généraux de la morale, de l'industrie, du commerce et de l'agriculture* (1869)

この著作は、タイトルを *Livre de lecture courante* というタイトルのもと、改訂版がいくつか出されて商業的な成功を取めた。

*Le Tour de France par deux enfants* (1877) は、アカデミーフランセーズから賞を受け、500 以上版を重ねている。これらの教科書は、1870 年の普仏戦争の敗北から第三共和制にいたるフランス国内での共和国民としての道徳を育成するという目的と合致したために爆発的に売れたのではないと思われる。(これらの本を出している個々の出版社は煩雑になるため割愛した)

この著作は、日本でも翻訳が出されている。ちなみに監修者北澤種一は欧米留学経験のある教育理論家及び教育者である。

『祖国に帰る』ブリュノ著 熊代豊子訳 北澤種一監修 郁文書院 1930 (昭和 5)

『祖国に帰る：総合教育・愛国読本』熊代豊子訳 北澤種一監修 精文堂書店 1938 (昭和 13)

- 4) ギュヨーの著作リストを以下にあげておく。

哲学思索

*Le Manuel d'Épictète traduction nouvelle suivie d'extraits des entretiens d'Épictète des pensées de Marc-Aurèle*, C.

Delagrave (1875) (バカロレアを受ける学生向けの手引き書)

*La Morale d'Épictète et ses rapports avec les doctrines contemporaines*, Félix Alcan (1878) (学位論文)

*La Morale anglaise contemporaine*, Félix Alcan (1878) (前掲論文の第一部)

*Vers d'un philosophe*, Félix Alcan (1881) (詩集)

*Les Problèmes de l'esthétique contemporaine*, Félix Alcan (1884)

*Esquisse d'une morale sans obligation ni sanction*, Félix Alcan (1885)

*L'Irréligion de l'avenir*, Félix Alcan (1887)

*L'Art au point de vue sociologique*, Félix Alcan (1889)

*Éducation et hérédité*, Félix Alcan (1889)

*La Genèse de l'idée de temps*, Félix Alcan (1890) この著作はフイエによって編まれたものであり、ギュヨーの論文は1885年の *Revue philosophique* に掲載されたものである。なお、Félix Alcan からは、1920年代にはギュヨーおよびフイエの著作集が出されている。

#### 教科書

*La Première année de lecture courante: morale, connaissances usuelles, devoirs envers la patrie* Paris, A. Colin (1876)

*L'année enfantine de lecture* Paris, A. Colin (1882)

*L'année préparatoire de lecture courante* Paris, A. Colin (1884)

*Méthode Guyau, Lecture par l'écriture* Paris, A. Colin (1893)

- 5) Augstin Guyau, *Œuvres posthumes voyages, feuilles volantes journal de guerre*, Félix Alcan (1919) を参照。
- 6) ギュヨーの生命概念については、拙稿「ギュイヨーにおける生命の道徳について」『フランス哲学思想研究』第4号 pp143-158 (1999年9月) を参考にされたい。
- 7) 『中江兆民全集』17巻雑纂 岩波書店 仏学塾規則明治15年9月(印刷小冊子) p.130
- 8) 井田進也『中江兆民のフランス』岩波書店 (1987)
- 9) 井田、『中江兆民のフランス』前掲書「ともあれ原著者は、アコラスの主催する『政治学』*La Science Politique* (シジスモン・ラクロハの原典で、恐らく『叢談』の編輯の手本となった) に *L'instinct moral et social, d'après MM. Spencer et Darwin* (N°9.-Mars 1879) を寄せている(その前号 N°8-Fev.1879には前掲 *Moral d'Épictète* の書評が載る)。この雑誌には日本人と関係の深いレオン・ド・ロニーやモンブラン伯と並んで兆民の親友今村和郎や光妙寺三郎が寄稿者欄に名を列ねており(本書第一章IV)、その交わりの輪の中にはむろん西園寺もいるから、兆民もまた原著者に少なからぬ親近感を覚えたであろうし、かねてよりこの少壮哲学者に大いに瞩目していただろうことは、ほとんど疑いを容れない」(巻末 pp.32-33)
- 10) 中江兆民のフランス滞在時については、記録資料が残されていないために現在でも不明な点が多い。帰国についてのプロセスも記録が発見されていないため諸説ある。

「中江兆民がふたたび日本の地で活動を始めたのは明治七年の秋であった。だが、中江兆民が日本に帰国したのは従来の研究では明治七年五月とみられてきていた。たとえば河野健二編『日本の名著 中江兆民』(中央公論社)年譜では「五月ごろ、フランスより留学生総引上げの命にしたがつて帰朝」と記されているが、松永昌三氏は『近代日本思想体系3 中江兆民集』(筑摩書房)「年譜」で「政府の海外留学生召還の方針により、五月に帰国」と断定されている。

だが、最近、東京都公文書館で閲覧した「開業免状御下渡願」という兆民提出の書類によって彼の帰国が七年三月以前と考えられる可能性も生じてきた。

(中略 開業免状御下渡願の全文引用なので割愛した—引用者註)

兆民は明治七年三月に授与された開塾許可状を転塾の折に紛失してしまい、これを再度下付してくれるように願書を東京府に提出したのであるが、これによると、明治七年三月にはすでに兆民は帰国していたことになる。兆民のこの再交付願書が十年五月の時点で書かれていることで、兆民の記憶違いということも考えられるが、これを受理した東京府の学務課の方にもつぎのような記録が残されている」(富田仁『フランスとの出会い 中江兆民とその時代』三修社 1981)

- 11) 明治初期の中江兆民らによるフイエの紹介以外のものでは、

*L'enseignement au point de vue national*, Librairie Hachette, 1891

の翻訳として

アルフレッド・フオウイリー『國家教育論』久津見息忠 普及舎 1896 (明治 29)

アルフレッド・フイーエ『立國教育論』中島半次郎 興亡史論刊行會 1919 (大正 8)

フイーエ『國家教育論』富野敬邦 玉川學園出版部 1942 (昭和 17)

*Esquisse psychologique des peuples européens*, Félix Alcan (1903)

の翻訳として

『歐洲各國民の心性』上巻下巻 稲垣末松 大日本文明協會事務所 大正 1 年 (1912)

がある。フイエの翻訳も明治末から大正、昭和初期にわたって出されているが、哲学的著作の翻訳紹介は『理学沿革史』以外にされていない。

- 12) 春秋社による『世界大思想全集』は、昭和 3 年 (1928) からの刊行である。ちなみに、第一巻は、村松正俊訳のプラトンの『国家』と三宅茂訳のデカルトの『感情論』である。*Les Passions de l'âme* (1649) の邦訳版はこれが最初であることを三宅は記している。

- 13) ベルクソンの哲学思想界における受容状況については、宮山昌治「大正期におけるベルクソン哲学の受容」『人文』第四号 2006 pp.83-104 を参照。

- 14) 高山峻は『現代佛蘭西哲學』高陽書院 1940 (昭和 15) の中で、ギュヨーが日本で親しまれていたことに言及している。それを理由に割愛したのか、別の理由があったのか明確にはされていない。

「メーヌ・ドゥ・ピランにその源泉を仰ぎスクレタン、ラズエッソン、ラシュリエの先驅者達に依つて力強く方向づけられた現代佛蘭西の形而上學的唯心論の思潮はブートルー (エミール) を経てベルグソンに及ぶと完域に達し現代思想の底深く穿たれた一大底流となつた。ベルグソンの現代哲學及び思想界に於ける決定的地位は不動のものであり之をめぐるこの思潮の全般的叙述を進め行くことが望ましいが便宜上個人的紹介に切り離して個別的に各哲學者の片影を捉へて見よう。尤も比較的我國に親しまれてゐるジャン・マリー・ギュイヨー Jean-Marie Guyau (1854-1888) や種々の意味で之と關聯して考へられるアルフレッド・フイーエ Alfred Fouillée (1838-1912)、ならびに佛蘭西哲學會 Société Française de Philosophie と離して考へられないアンドレ・ラランド André Lalande (1867- ) (註 原文ママ) の三者は割愛した。」(pp.38-39)

高山は、『イデ・フォルスの哲学 フイエとベルグソン』山本書店 (1959) において、フイエの哲学について語っている。

- 15) 「北聆吉の歩み 戦前戦後の主なる業績について」(『比較思想研究』2002 第 29 号部冊 pp.14-18)

北吟吉の生涯については、稲邊小二郎『一輝と吟吉 北兄弟の相克』新潟日報事業社 2002 も参照した。

- 16) 井上勇は『時間観念の創成』において訳者覚書を残しているが、書誌的情報に終始している。

「一、本書はギュイヨオの遺著 *La Genèse de l'idée du temps* (ママ) の全譯である。

一、テキストは、Félix Alcan の第二版によつた。

一、譯語はなるべく普通使用のものを使用することを所期したが新譯語も多少使用した、例せば *Durée* に時間の譯語をあて、*Temps* に時の譯語を與へたが如きである。普通邦語に用ひらるゝ時間は、本書においては時となつてゐる。但し表題だけは便宜のため *Temps* を時間とした」という程度のものである。*Durée* は、ベルクソンにおいて生命並ぶ基本概念であり、現在であればギュヨールのこの著作においても「持続」と訳されるべき言葉である。

- 17) 聚英閣及び「叢書」については、紅野敏郎『大正期の文芸叢書』雄松出版 (1998) を参考にした。聚英閣以外では、赤城正蔵による「アカギ叢書」や博文館の「近代西洋文芸叢書」、平凡社による「佛蘭西哲學叢書」等々がある。これらの叢書で紹介されているフランスの思想家や文学者は、ルソー、コント、ベルクソン、ルボン、モーパッサン、ゾラ、ゴングルール、デュマ等であり、同時代性や近代性を売りにして、売れそうな著作を集めている。ただし、これらの「叢書」の翻訳や著作については玉石混淆の観がある。大学を卒業したての学生に訳出させたりと出版点数を確保するための「努力」をしていたようである。

- 18) 宮本和吉「四十四年の思想界」『哲學雑誌』299号 1912 (明治 45) p. 142

- 19) 大杉栄「生の道徳 ジャン・マリ・ギュイヨー」(『近代思想』2巻 1号 1913)

大杉のこの論述は、ギュヨールの生涯と思想について平明な言葉で説明したものと *Esquisse d'une morale sans obligation ni sanction*, Félix Alcan (1885) の結論部分の翻訳から校正されている。フイエが書いた *La Morale, l'art et la religion d'après Guyau*, Félix Alcan, (1889) と *Nietzsche et l'immoralisme*, Félix Alcan (1902) の書名を上げていて、それらを参考にしてギュヨールの生涯と学説を説明していることが分かる内容になっている。ギュヨールの紹介文として、かなり良質であり、大杉の語学力の確かさと理解力が伺われる文章である。翻訳部分もギュヨールの意を汲んだ意訳や造語を試みている。

- 20) 参考までに錦田義富の論文及び著作を紹介しておく。

論文「ギュヨールの宗教論」『靈界』1913 (大正 2 1巻 7号-1巻 8号)、「リッカートの「文化科學と自然科學」『京都法學會雑誌』1913 (大正 2.8 1914 大正 3.9)、「カントの畏敬の情に就いて」『思想』1916 (大正 5.9)、「現代に於ける自我問題の一面」『改造』1925 (大正 14.4) など。

著書『実践哲学研究』改造社 1928 (昭和 3)、翻訳『ベルグソンの哲学』警醒社 1913 (大正 2)

- 21) 錦田義富「ギュヨールの道徳無義務論」『丁西倫理會講演集』第 116号 1912 (明治 45) pp. 44-45

- 22) 錦田前掲論文 pp. 69-70

錦田によるギュヨールの評価は、『ベルグソンの哲学』の序文でも述べられている。

「面白い事には、千八百八十年代の佛蘭西哲學界には、「時間」の研究に一新生面を開いた學者が、三人迄現はれた。そして皆が獨立無關係で、同一問題を取り扱つかったのは、不思議な暗合と云はねばならぬ。千八百八十三年にピュヨン Pilon は、「哲學批評」*Critique philosophique* で、千八百八十八年ギュヨー Guyau は「時間観念發生論」*La genèse de l'idée (idée) de temps* で、各々獨特の時間論を發表したが、最も精細緻密新卓抜なのは、云ふ迄もなくベルグソンの論文である。問題は同一でも、所論は三人三様で、立場も違へば、結論も異つて居る。然し三人

の間には、期せずして一致した点がある。即ち、普通の時間観念は、純粹な時間観念でなくて、空間心像を混入したものである。而して此事實は、哲學上重大な意味ある事を、論結した点である。メイン・ド・ビラン Maine de Biran に源を發し、ルヌビエ Renouvier で發達した佛國時間論が、此時代に於いて華を咲かせたのは、思想發達に留意する人にとつて、興味深事實であらうと思はれる。然し専門の學究には兎も角、一般世間にはベルグソンの此新研究も、左迄注目されなかつた。」 錦田義富訳『ベルグソンの哲学』1914（大正 2.3）警醒社 pp.5-6

23) 京都帝国文学科大学は、明治 39 年 9 月開校である。その開校にあたっては、明治 31 年（1898）にはその準備のために早稲田専門学校（現早稲田大学）教授大西祝が哲学研究のためにドイツに派遣留学、明治 32 年（1899）には第一高等学校教授文学博士松本文三郎がインド哲学研究のためにドイツに派遣留学、高等師範学校教授谷本富は教育学研究のために英・仏・独へ派遣された。錦田在学当時の哲学科は桑木巖翼、朝永三十郎、明治 43 年（1910）には、西田幾多郎が倫理学助教授として来任していた。初年度だけ Pierre Auriens（1854-1920）が哲学の講座を担当したが、その後はフランス語の講師になった。Pierre Auriens は、パリ外国宣教会（Missions Etrangères de Paris パリミッション会）の海外宣教師である。『京都帝国大学文学部三十年史』京都帝国大学文学部三十周年記念出版 1935（昭和 10）

24) 錦田、前掲論文 p.70

25) ドミニック・パロヂ 著 三宅茂譯『現代フランス哲學』春陽堂 1937（昭和 12）pp.3-7

26) 伊藤吉之助「哲學會史料（上）」『哲學雜誌 參百號記念』1912（明治 45）p.359

## 付記

本稿は、学習院大学人文科学研究所共同研究プロジェクト「明治期以降におけるフランス哲学の受容に関する研究」（平成 16 年度から平成 18 年度）による研究成果の一部である。



## 日本におけるジャン＝マリー・ギュヨーの受容について

鈴木由加里

フランス哲学が日本に輸入されて以来、多くの哲学者が紹介されたが、現在では忘れられている哲学者も少なくない。ジャン＝マリー・ギュヨーもそのような哲学者の一人である。ギュヨーは、中江兆民の編んだ『政理叢談』において、その著作が紹介され、明治末期から大正期にかけては、多くの邦訳が出版され、また英訳を介して文壇及び大正期の文化に影響を与えた。アカデミズムでも美学・教育学・道徳学において一時期取り上げられたが、その後アカデミズムでは取り上げられず、主体的に論じられることもないまま現在に至っている。

明治末から大正期にかけて発展した大学制度においては、哲学といえば新カント派のドイツ哲学であり、それに対抗するものとして、当時のフランス哲学が在野の文化人や一部の大学の研究者によって取り上げられてきたものである。フランス哲学の受容において、重視されたのは、「現代性」「同時代性」であり、それ故、明治大正期に取り上げられたベルクソンやブートルーなどは「現代哲学」として受容されていたのである。

難解であるけれども思想的な深さをもつドイツ哲学に対して、明晰判明であるが浅いフランス哲学という批判を退けるために、ギュヨーを初めとするフランス哲学者がアカデミズムにおいて紹介されたのである。その目的は、ギュヨーの思想の研究ではなく、むしろフランス哲学の特性を証明するためであった。

そこには、ドイツ哲学を経由したフランス哲学観を離れてフランス哲学を研究することへの希求が存在している。しかし、そのフランス哲学受容の必要性の主張の裏には、「現代哲学」としてのフランス哲学を研究し、それを日本的な哲学の創生に役立てるという目的も同時に存在しているのである。欧米の思想の輸入過多に対して、日本的なるもの、日本独自の哲学という西欧思想との融合に際して、フランス哲学が利用されていたのである。そのような目的において、ギュヨーの哲学は役立つと考えられなかったためにアカデミズムの中で研究されなくなっていった。ギュヨーの生命の哲学を日本的な文脈の中に置き換えることは難しく、19世紀末に夭逝した哲学者であったために哲学史における評価も定まらず、ベルクソンの哲学ほど利用価値がないと判断されたために忘れられた哲学者となっていたのである。

**キーワード**【ジャン＝マリー・ギュヨー フランス哲学 生命論 哲学史 哲学教育】

## On Jean-Marie Guyau in Japanese Academism

Yukari SUZUKI

Although many philosophers have been studied since French philosophy was first introduced into Japan, many of them are forgotten. Jean-Marie Guyau is one of those. His work was first quoted in “Seirisodan” (Journal of Political Theories) edited and compiled by Nakae Chomin. Subsequently many translated versions of his books were published and influenced Japanese literature and culture in the Taisho period. Japanese academics also quoted his work in aesthetics, education and moral science. Temporarily however it stops quoting and has been up to the present. The main points of French philosophy adoption were “modernity” and “contemporaneity”. Therefore Bergson and Boutroux were accepted as “philosophy of contemporaries.” However the main purpose of the introduction of French philosophy was establishing the attributes of French philosophy rather than studying Guyau’s philosophy. There is a desire to search French philosophy that is not the one via German philosophy. At the same time, there is another purpose -to build a Japanese-style philosophy through researching French philosophy as the “philosophy of contemporaries”. Therefore academics ceased studying Guyau since they determined that his philosophy was not useful to this latter goal. As a result, he became a forgotten philosopher.

*Key Words:* Jean-Marie Guyau, French philosophy, philosophy of life, philosophical history, philosophical education